

カースト制における社会秩序の維持と死生観

宮 崎 智 絵

1. カースト制の概要

カースト制はインドにおいて絶対的なものとして長い間、人々の生活、文化などに多大な影響を及ぼしてきた。しかし、その起源に関してはさまざまな議論がある。ヴァルナ間雑婚説、職業重視説、人種重視説、アーリア人家族制度起源説、先住民起源説、宗教起源説、折衷説である。いずれにしろ、インドに古代から存在した社会システムであることには変わりがない。¹⁾ インドにおけるカースト制の起源を紀元前1000～紀元前600年頃とするならば、実に2500年以上もの間、インドに存在している社会システムなのである。そして、現在は1950年に法律上廃止となってはいるが、その痕跡は随所に存在する。

また、カースト制は地域によっても相違があるため、非常に複雑でわかりにくいシステムであるが、共通する特質が3つある。つまりカースト制の定義は以下のように集約することができる。²⁾

- 1) 族内結婚の厳守。自分の属するカースト以外のものとの結婚は許されない。しかし同一カースト内でも同じゴートラ（共同家族）とサピンダ（sapiṇḍa 親族）の間でも結婚はできなかった。
- 2) 伝統的な職業の世襲。単に職業の上下いうのではなく、浄・不浄の觀念の問題もある。
- 3) 食物に関する禁忌。それぞれのカーストには飲食物などについて厳重なタブーがあった。また、食事を共にする共食は、同一カースト集団に所属することを内外に表示する象徴的な行為であった。一度カース

トから追放されたものも多くの場合、「浄め」の儀式を受ければカーストへの復帰を許された。その際、カースト仲間 (got ゴート) 全員を招待して共食をしなければならなかった (jāti bhojan カースト会食)。これは、カーストに復帰したことを内外に示す意味をもっていた。

そのカースト制を維持していたもののひとつとして浄・不浄、ケガレの観念があるが、それに加えて救済というシステムがあげられる。このシステムはヒンドゥー社会の秩序を維持するシステムとしても機能していた。つまり、カースト制はその是非はともかくとして、社会的意義を備えていたからこそ長い間、維持されているのである。

2. カースト制と死生観

ヴェーダ時代は、『リグ＝ヴェーダ』にカースト制の起源であり、その後もカースト制の精神的あるいは正当化の基盤として尊重される讃歌がある。すなわち、プルシャ（原人）の歌（10-90）において次のように語っている。³⁾

- 2 プルシャは、過去および未来にわたるこの一切（万有）なり。また不死界（神々）を支配す、食物によって成長するもの（生物界、人間）をも。
- 6 神々がプルシャを祭供（供物）として祭祀を執行したるとき、春はそのアージャ（グリタ）なりき、夏は薪、秋は供物〔なりき〕。
- 7 祭祀そのそのものたる彼を、バルヒス（敷草）の上に、彼らは灌ぎ清めたり、太初に生まれいでたるプルシャを。神々は彼をもって祭祀を行なえり、サーディア神群も聖仙らもまた。
- 11 彼らがプルシャを〔切り〕分かちたるとき、いくばくの部分に分割したりしや。彼（プルシャ）の口は何になれるや、両腕は何に。両腿は何と、両足は何と呼ぶるや。
- 12 彼の口はブラーフマナ（バラモン）なりき。両腕はラージャニアとなさ

れたり。彼の両腿はすなわちヴァイシャなり。両足よりシュードラ生じたり。

プルシャを供物とした祭祀は、プルシャが祭祀そのものであり、獣や詩節、祭詞、月、太陽、インドラ、アグニ、天・空・地界がそこから生じた。プルシャの供犠は創造を解く鍵となっており、初期の作品では他のすべての供犠はこの大いなる供犠の模倣だと信じられた。つまり、以後の供犠の原点でもあるのだ。また、この「原人の歌」におけるブラーフマナ (brahmana)、ラージャニア (rajanya)、ヴァイシャ (vaiśya)、シュードラ (sudra) とは、まだヴァルナ制 (Varna 四制制度) を指すのではなく、単に職業を区別したものと考えられる。⁴⁾ だが、祭祀の執行により出現したもののなかの一部としてこれらは生じたのである。祭祀という神聖であり正規の手続きによって出現したカーストは、ここにおいて宗教的に認知、肯定され、正規化がなされたことになる。そしてこの讃歌こそが後のシュードラや不可触民差別の正当な理由、根拠とされるのである。

また、カースト制において不可触視される社会集団チャンダーラ (chandala) が現れるのは、後期ヴェーダ時代 (前1000～前600年頃) の末期である。この時代はバラモンが司祭職を独占し、ヴァルナ社会最高位を確保した時代でもある。バラモンたちは原始的で素朴な浄・不浄思想を極度に発達させ、自己の浄性や神聖性を強調したが、この浄性の強調は、社会の一方の端に不浄とみなされる集団を生んだ。そしてここにバラモンを最清浄、不可触民を最不浄とし、その中間にヴァルナ社会の構成員を浄・不浄の度合いに従って配列した社会秩序が成立をみたのである。⁵⁾

この頃の死生観は、『リグ＝ヴェーダ』に見ることができる。最初の人間ヤマは同時に最初にこの世を去った人間でもある。したがって死後の道を拓いたものといわれ、人間は死後ヤマの拓いた道をふんで最高天にあるその住居に入って幸福を得ると考えていた。ヤマの王国は緑陰・酒宴・音楽にめぐまれた理想の楽土であったが、他方、現世で悪い行ないをしたものの堕ちて行くところは、

三界の下にある暗黒の牢獄であるとされた。⁶⁾ しかしながら、まだカーストの序列による前世観と死後の運命については強調されていない。単純にその行為による死生観であり、輪廻の思想がまだ萌芽していないからである。

そしてブラーフマナ時代までに祭祀階級は、社会的地位と職能の重要性を確立していた。少なくとも『リグ＝ヴェーダ』の段階では、神々や神々の行為が力を持ち、それに語りかけ働きかける能力があるということから祭官が重要視されていたと考えられるが、この時代のブラーフマンは遂行する祭式そのものが世界を維持し、動かす位置にあると考えられるようになる。あるいは、共同体の中でそうした役割を担っており、神々は祭式の一構成要素という位置に後退している。⁷⁾

つまり、神々にかかわって祭式が世界観の根底を構成し、祭式は単なる手段ではなく、独自の存在として神々を強制し、宇宙の諸現象を支配する力があると信じられたのである。神々すらも祭式を行なうことによって不死を得るのである。祭式に絶対的な力があるとすれば、それを執行するバラモンたちはもはや神々に奉仕する司祭者ではなく、祭式の力によって神々を支配する強力な存在であり、「学識ありヴェーダに精通しているバラモンは人間という神である」といわれるようになったのである。⁸⁾

ブラーフマナにおける死生観は、『リグ＝ヴェーダ』とそれほどの違いはなく、死後は最高天にあるヤマの世界において祖霊たちと交わることを理想としていた。しかし、すべての死者が無条件にヤマのもとへ行けるわけではなく、ヤマ自ら真理に忠実な者と虚妄を語る者とを区別すると言われ、地獄の観念がやや明確化し、因果応報の観念や死後に再び死ぬ「再死」があると考えられた。この「再死」は、正しい祭式の知識をもたないもの、祭式をおこたるものは死後も再び死をくりかえさなければならない、というものであった。この再死を克服してはじめて不死となることができると考えられ、再死をたいへんに恐れ、克服することを願った。⁹⁾ また、生前の行ないが良くない死者が赴く地獄もある。例えば『ジャイミニヤ・ブラーフマナ』では、ヴェルナの息子ブリグが地獄を遍歴する物語が説かれており、地獄に堕ちるのは、祭祀を行わなかった

者、祭祀について正しい知識を持たずに祭祀を行なった者だとされる。さらに、そこには信仰がなければならないし、バラモンを迫害する者も贖罪であるとされた。それゆえに人は生きている間に正しい知識を持って祭祀を執行し、バラモンを敬い、大切にしなければならないのである。これはまさに因果応報の思想である。

ウパニシャッドでは、五火二道説が登場し、輪廻思想が萌芽した。生まれ変わりは偶然ではなく、因果応報の原理によって決定されることが明らかにされているのである。

五火説は、火葬後の靈魂の帰還が五重の供儀の比喩の下に描写されるが、最初の供儀の際、神々は信仰を祭火として天界に捧げ、それから月が生じる。第二に、月を雨神に捧げ、第三に大地に雨を捧げ、その結果として食物が生じる。さら食物を男性に捧げる、それによって精液が生じる。そして、最後に婦人の胎内に精液を供物として捧げることによって胎児が生じる、というものである。二道説は、神道 (devayāna) は、炎、日、明るい半月などのように明るい宿駅を通過して、ふたたび地上に戻って来ないでブラフマンに至る道であり、これが解脱への道である。他の道は、祖道 (pitryāṇa) と言われる。この道は、日常的・宗教的な意味での善行を行なった人々に対して定められている。それは暗い宿駅を通過して月に至り、そこで善行の果報が享受される。しかし、靈魂は、(その果報が尽きるや否や) 虚空、風、煙、霧、雲および雨によって月から大地へと戻り、植物のなかへ入る。そして、ある男性がその植物を食べれば、靈魂は彼の精液のなかに宿る。さらに、この父の選択も道德的な制約を受けている。前世においてよい行ないをすれば上層の三カーストの一つに再生することになるが、それに反して悪い行ないをすれば犬、豚あるいは不浄なカーストに再生することになるのである。¹⁰⁾ つまり、二道説ではこの世で好ましい行ないを積む者は、好ましい母胎に、すなわちブーフマナ、王族、庶民 (ヴァイシャ) の母胎に入り、汚らわしい行ないを積む者は、汚らわしい母胎である犬、豚、チャンダーラの母胎に入るとされたのである。ここでは、はっきりとカーストによる死生観の差が出ている。高いカーストは好ましいものとして良い行

ないの者が、低いカーストは悪い行ないの者が再生するという死生観は、以後のカースト制を特徴づける思想的基盤となる輪廻と業の原型であると言えよう。

仏教・ジャイナ教時代のカースト制は、部族の集会が事実上消滅し、部族が諸ヴァルナに分解し、四階級にはっきりとわけられ、家を基礎とする階級社会が確立していた。

仏教では、在俗信者は仏・法・僧の三法に帰依し、五戒（不殺生，不偷盗，不邪淫，不妄語，不飲酒）ないし八戒をたもって信心の確立に努めた。「戒」とは自誓・自戒の意味で、自発的に守ってそれが習慣化して身につくことを本義とする。大乘仏教は十方の世界に多くの仏たちの存在を予想し、その浄土を説くが、なかでも西方極楽世界（Sukhavati）にある阿弥陀仏の信仰が最も普及した。阿弥陀仏はその寿命が無量（amitāyus 無量寿），その智慧の光が無量（amitābha 無量光）といわれる。時間的・空間的な仏の絶対性を象徴する仏であるが、阿弥陀仏の慈悲は、ただその名前を心に思い浮かべるだけでも、愚生を死後その浄土に迎えるほど広大であるという。¹¹⁾

ブッダは、宗教体験を通じて把握された人間の真実を人としてあるすべての人間に共通普遍なものであり、社会階級の差には関係がないとして、カースト制などの階級に意味がないことを説いている。¹²⁾

ジャイナ教では、マハーヴィーラが、現世の悲惨、苦悩を「生きものは生きものを苦しませる。見よ、世間における大いなる恐怖を。……かれらは無力なる脆き身体もて破滅に赴く」とし、この苦悩から解脱するために形而上学的考察を行なう。宇宙を靈魂（jiva）と非靈魂（ajīva）とに大別し、靈魂は地・水・火・風・動物・植物に存在する六種があるとした。靈魂の本質は精神作用であるされ、また、人は身・口・意によって業（karman 行為）をすると、その業のために微細な物質（anu）が靈魂に付着し、業身を形成するために靈魂の上昇性が妨げられる。この繫縛（bandha）によって靈魂は地獄・畜生・人間・神々の四つの境界を輪廻し、苦しみの生存をくりかえして解脱することができないとした。解脱するためには苦行（tapas）によってすでに行なわれた古い業の作用を制止するとともに、他方では新しい業の流入を防止する。こ

のように修行によって業の束縛がなくなり、微細な物質が靈魂から離れて止滅 (nirjarā) すると、靈魂はその本性を発揮し、人は生前に解脱の境地を獲得する。このように『アーヤーランガ』では解脱を説明している。

やや遅れて成立した解脱論では、真の解脱は死後に得られるという。身体が死ぬと解脱した靈魂は上昇性を発揮して上方に進み、世界を脱出してその頂点にある非世界に達する。そこにおいて靈魂は涅槃の境地を得て、絶対の安楽が得られ、真の解脱を実現する。このような解脱を得るために比丘 (bhīṣkuta) たちは断食苦行に徹し、ジャイナ教では断食による死が極度に讃えられている。このことに関して初期仏教聖典はジャイナ教の解脱論について伝えている。

かのニガンタ・ナータプッタはこのように言った：実にニガンタ達よ、君達には、過去に作られた悪業がある。それをこの激しい難行によって滅すべきである。しかるに、今ここで、身体を防護し、言葉を防護し、心を防護すれば、将来悪業を作らない。こうして、諸々の古い業を苦行によって滅し、新しい業（身口意を防護して）作らないことにより、将来漏入することがないから。将来漏入することがないから業が尽きる。業が尽きるから苦が尽きる。苦が尽きるから受が尽きる。受が尽きるから一切の苦が滅したことになるであろう。

このようにジャイナ教の解脱は苦行による古い業を滅ぼして、身口意の防護により新しい業を作らず、新たな業の漏入を制止することである。そして苦行によって完全な解脱を得ることは、肉体の死を意味した。¹³⁾

また、カースト制についてジャイナ教の倫理は、バラモンの氏姓カリスマを否認し、バラモンの呪術的支配からの解放を目指ところに成立した。ジャイナ教のカースト制に関する立場は、カーストを否定し、シュードラであっても柔業・真実・徳のうちに努めている人をバラモンだとし、その行為によってシュードラも再生族となるとした。絶対的な力をもったバラモンによる祭祀

が世界の根底を構成していたブラーフマナから脱却し、だれもがその努力によってカーストを超越できるというものであった。

しかしながら、ヒンドゥー教では、非ブラーフマナ主義的な仏教やジャイナ教が伸張していき、都市文明の担い手である王侯貴族や大商人たちを支持者として次々と獲得していったことに、生活基盤喪失という危機感を抱いたブラーフマナたちは、先住民族の宗教的要素を積極的に取り込み、習合宗教としてのヒンドゥー教を構築した。こうして多数派工作は、宗教の徹底的な民衆化に直結し、最高神による万民の救済というテーマを前面に押し出すことになった。¹⁴⁾

また、シュードラと見なされる社会層の拡大を前にして、バラモンは伝統的なシュードラ観の変更を余儀なくされた。農村に住むバラモンは、シュードラ農民のために冠婚葬祭をはじめとする儀式を執り行い、その報酬で生活を支えなければならなかった。したがって、法典の原則通りにシュードラを自分たち宗教から排除するならば、バラモン自身の生活が成り立たなくなる。譲歩を迫られたバラモンは、ヒンドゥー教の聖典として尊ばれるようになった叙事詩『マハーバーラタ』『ラーマヤナ』や『プラーナ』をシュードラに開放することによって現実と妥協した。つまり中世に入ると、シュードラを仲間に加えたヒンドゥー社会の形成が進み、その一方では四ヴァルナの下に位置づけられた不可触民の数が増大し、不可触民制が発達したのである。そして古代のシュードラ差別のかなりの部分が、不可触差別の中に吸収されていったのである。¹⁵⁾

プラーナ文献では、カリ・ユガにおいて正しい法が失われているさまが種々にえがかれた。この時代には人間の誠実さ、寛容さ、慈悲心などはもとより、寿命も体力も智慧の力もなくなる。カーストやアーシュラマ（バラモンの生活階梯）は乱れ、財産だけがすべての基準となり、人々は欲張ることしか知らない。大風、大雨などの災害がおこり、人々はますます悲惨な状態となっていく。ヒンドゥー教はこのような一種の終末観にもとづいて神による救済を説くのである。ヴィシュヌ神とアヴァターラ（権化）のうちで仏陀とカルキがカリ・ユガにおい出現するとされ、とくに仏陀として出現したとき、まさにカーストが

混乱し、アーシュラマが乱れる時代であった。仏陀について出現するカルキが野蛮人を滅ぼし、カーストとアーシュラマを確立して人々を真の宗教であるヒンドゥー教に導いたとする主張には、仏教にとってかわってヒンドゥー教がインドの民衆の宗教になっていった過程が暗示されていると思われる。¹⁶⁾

ヨーガは、業の蓄積は神・人間・動物などの中のどの世界に生れるかを決定したり、寿命の長さや快苦の経験を規定するものとして発現する。煩悩はそれだけで独立に発現することはないが、善悪の行為の動機として発現するので業の蓄積の原因であるとされた。この意味において、煩悩こそ輪廻の根本因であるということができる。煩悩、特に無明が除去されれば、無明を原因とする業が結果を産むことはない。苦行・学習・最高神への専念という行作ヨーガの実践によって煩悩の力が弱められ、ついで禅定によって諸煩悩の活動が止滅する。そして心は根本物質の中に帰入してしまい、輪廻は消滅し、肉体の死とともに完全な解脱が実現する。¹⁷⁾

ヴェーダーンタでは、ラーマヌージャ、マドヴァ（ヴェーダーンタの三学匠）が、超越的人格神ヴィシュヌを「聖なるもの」とし「信仰宗教意識」による救済への道に足を踏み入れたかに見える。ラーマヌージャは、バクティは不二一元論における「俗なるもの」の宗教実践の性格を帯びたものだった。ラーマヌージャにおいては「俗なるもの」のバクティという宗教実践によって救済を図るという自力型宗教の色合いが濃かった。マドヴァは、ヴィシュヌ神の絶対性がより強調され、したがってその恩寵による救済が主たるテーマとなり、バクティの意義が薄れていく。恩寵型宗教の様相を強く示している。知の意味合いを色濃く持つバクティは、達人宗教の性格を持ち、僧院を中心とする選ばれた修行僧のものであった。これに対して愛の側面を重視したバクティは大衆的、民衆的なもので、神の広大無辺の愛とその恩寵を強調したものだった。¹⁸⁾

3. カースト制と社会秩序

ヴェーダ社会において不可触民の存在は、生産階級であるヴァイシャとシュー

ドラの不満をそらせ、安定的維持を約束するものであった。これ以後の時代において、不可触民は、外側から枠付けし、階級関係を浄・不浄観に基づく身分秩序として固定化する役割をはたしてきた。²⁵⁾

ウパニシャッドで登場した因果応報思想は、当初は、多分にブラーフマナたちの自己保身のために案出されたものであったとしても、広くインド亜大陸の居住者たちに受け入れられたのは、悪平等を回避し、責任の所在を明らかにし、社会秩序を強力に支える最も明解な発想法だと認められたからにはほかならない。¹⁹⁾

さらにアショーカ王（在位 BC268年～BC223年）の時代には、バラモンたちは祭式を駆使して村落の社会秩序を維持し、カースト的社会が定着していた。²⁰⁾

中世においてカースト集会は郡あるいは郷という「地域社会」を単位として、その「地域社会」内のカースト集団の長である「カースト頭」が招集して開かれた。それは、各カースト集団が第一次的には「地域社会」を結集の単位としていたからである。しかし、「地域社会」の範囲を越える問題が起こった場合には、各「地域社会」の「カースト頭」などが集会する、広域的な「カースト集会」も開かれた。しかしカースト集団は、第一次的には「地域社会」を結集の範囲として、カースト結合はそこにとどまるものではない。近隣の「地域社会」の同一カースト集団とのあいだにいわば二次的な結合関係を取り結んでいたのである。カーストという人間集団を考える場合には、日常生活をとおして緊密に結びつきあっている集団、つまり「第一次集団」の次元と、そのような第一次集団が次々と結びついて、いわば網状をなした広域的カースト結合の次元との、二つの次元を考えなければならない。実際には村境争いが起こると、「地域社会集会」が開かれて、裁定が行われたのであるが、双方の主張が対立して、なかなか決着がつかない場合が多かった。そのようなときには、どちらかが「ディウヤ」と呼ばれる「神裁」を受けて、神意を問うということが行なわれた。神裁には、真っ赤に焼けた鍛冶屋の鉄敷を手にとって、手が焼けただれなかったならば、神意にかなったとする方法があった。その他に、器の中で、油と精製バター油とをあつく熱し、その中に鉄片を入れて、それを素手でつか

み出しても傷がつかなかったならば神意にかなったとする方法があった。²¹⁾

そして「罪と穢れと贖罪」をめぐる一連のプロセスにはカースト制社会と国家権力との間の相互補完的關係が明瞭に示されてる。前近代の国家は、一般に、被支配諸階層を何らかの形で身分的に編成し、掌握することなしには支配をつづけることができない。インド史上に存在した諸国家は、この社会の身分的な編成を自前の身分制度（国家的身分制）によって行なうのではなく、カースト制という既存の、社会そのものが再生産する身分的編成に依拠して行なった。したがって、国家側にとっても、カースト制的社会秩序を維持することが必要であった。中世デカンの諸国家も、身分的社会編成の基礎をカースト制に置いていたから、カースト制的秩序を維持するためには、時にはカースト制的社会關係に権力的に介入した。具体的にいえば、国家は、それぞれのカースト集団内部の秩序を維持するとともに、各カースト集団間の序列關係を維持し、その変動を阻止する機能を果たしたのである。カースト集団内部の秩序を維持するために、国家は、カーストからの追放、およびその解除（カースト復帰）を国家の統制下で行なわせようとした。²²⁾

また、ヒンドゥー教徒の生活、倫理を規程する『マヌ法典』には、四身分に対する職務についての規定がある。ブラフマンを最清浄とする理由とその生き方、あるいはシュードラに対しても生き方を規定している。さらに雑種身分についての規定も細かくされており、ブラフマンを頂点とする身分秩序が贖罪、生き方、職務のみならず輪廻・転生にまで及んでいる。そして、シュードラを儀礼の場から排除することを目的とした規定も多い。またシュードラによる上位ヴァルナの権利の侵害に対しは死刑を含む重い罰が加えられている。しかしながら、現実との妥協をはかったさまざまな規定が見出される。シュードラとのさまざまな接触によって穢れた者に対する浄化儀礼、シュードラの料理した物を条件つきで食べうるとした規定、シュードラ女性との結婚を条件つきで認めた規定などである。窮迫時には原則的規定がさらに緩められた。「窮迫時のバラモンは誰から布施を受けてもよい」、「生命の危機にさいしては誰から食物をもらって食べても穢れることはない」というのである。

『マヌ法典』以後に成立した『ヤージュニャヴァルキヤ法典』（100～300年頃成立）では、依然としてシュードラ差別・シュードラ排除の原則が掲げられている。しかし、その一方で、ヴァイシャとシュードラの区別がいつそう曖昧化した現実を語る記事も存在する。例えば、『ヤージュニャヴァルキヤ法典』にはシュードラが商業に従事することを認めた規定があり、保守的なバラモンも、現実を認めざるをえなかったのである。言い換えるならば、シュードラを排除した「アーリア社会」の観念が後退し、シュードラを加えた「ヒンドゥー社会」の観念が前面に出てきたのである。²³⁾ このことは、シュードラ差別が不可職民差別へと移行、吸収される要因の一つともなったのである。

イギリスは、1763年のパリ条約で東インド会社のインド支配を認められ、マイソール戦争、ロヒラ戦争、マラータ戦争、シク戦争を経てインドの支配を確立した。正式には1877年にヴィクトリア女王がインド皇帝となってから始まる。²⁴⁾

このイギリスの支配により裁判所制度が整備されてくると、さまざまな訴訟がインド人達によってもちこまれるようになっていき、1772年にベンガル知事は次のような規定を定めた。

相続、婚姻、カースト、その他の宗教的慣行および制度にかんするあらゆる訴訟事件では、ムスリムに対しては『コーラン』、ヒンドゥーに対しはシャーストラに依拠して裁判すること。

つまり、宗教によって同じインド人でも対応を変えるという非常に柔軟な政策をとっていたのである。しかしながら、それと同時にイギリス植民地統治のための法としての「ヒンドゥー法」に、「再生族」と「一生族」という区別がもちこまれたことは、さまざまなカーストのヴァルナ所属の問題を法廷にひきずりだすことになり、そのことは当該カーストのみならず、それ以外の多くのカーストにも自己のヴァルナ所属を強く意識させることになった。確かに中世にもヴァルナ所属をめぐるしばしば紛争が起こった。それは政治的、経済的実力を蓄えてきたカーストがカースト制的社会序列における地位の上昇を実現しようとして、さまざまな動きを見せる時、とくにバラモンとの間に紛争が発

生しやすかった。しかし、法廷でのヴァルナ所属の問題は、中世の場合よりもインド社会をますます「カースト的」性格の社会へと変質させていくことになったのである。そして、カースト集団そのものの方は、あきらかにイギリス植民地支配のための末端の社会組織（社会集団）として政策的に利用されたということができる。そして、そのためにとられた政策が「カーストの自治」政策だったのである。諸カースト集団に「自治権」を与えることによって、諸カースト集団内部の秩序維持を保証し、それをとおして、インド人社会全体の秩序維持が保証される。これが「カーストの自治」政策の狙いであった。いいかえれば、「カーストの自治」政策とは、カースト集団を末端の社会組織として利用することによって、安価に社会秩序を維持することを可能にしようとする政策だったのである。²⁵⁾

4. 結 語

インドはその歴史上、イスラム勢力やイギリスによる支配などヒンドゥー以外の支配を受けた。しかしながら、その中にあってカースト制は失われることはなく、逆に複雑に発展し、インド社会と不可分のものとなっていった。その要因の一つとして業、輪廻思想および浄・不浄、穢れ概念が、カースト制を支える思想として発展した、ということが挙げられる。そこには、差別とともに救済によってバランスを保つという戦略が伺える。最初はシュードラを除く再生族のみによるカースト制であったが、後にシュードラを加えたヒンドゥー社会という枠組みでのカースト制を適用することによって、宗教的理由のみではなく、社会的秩序のバランスという点でのバランスも維持する機能を保ったのである。そして、差別のみではなくそこに救済というアイテムを織り込むことにより維持されたのである。要するに、このバランスこそがカースト社会の秩序を保つ一つの要因となったと考えられる。

さらにイギリスは、このシステムを利用、拡大することによって発展させ、植民地支配を巧妙に行なったのである。その結果、カースト制は他に類をみな

い複雑な階級システムとして発展したのである。シク教徒は、カースト制を無視して農民および低カーストを重視する国家的結合が成立させ、18世紀後半にはその勢力を拡大した。しかし、このシク教徒をもってしても結局はカースト制はなくなることにはなかったのである。²⁶⁾

註

- 1) ヴァルナ間雑婚説は社会には多種多様な血縁集団、職能集団、民族が存在したが、バラモンはこれらの集団とヴァルナ社会において占める位置とをヴァルナ間の雑婚とヴァルナの義務の不履行（墮落）によって説明しようとした。職業重視説は文明社会では職業が分化し、同じ職業を世襲する者たちの集合体が成立するという同職者集団にカーストの起源を求める説。人種重視説は黒色の先住民を征服した白色のアーリア人が、自己の血の純粋性を守ろうとして定めた内婚の掟にカーストの起源を求める説。アーリア人家族制度起源説はカーストの起源はアーリア人社会のなかに求めるべきであるとする立場。先住民起源説はアーリア人侵入以前にドラヴィダ人によってすでに創出されていたという説。宗教起源説は原住民の間に原始信仰に基づくある種のカーストが存在しており、そうした原住民をアーリア人が征服した結果、上下関係の原理が持つ込まれて今日のカースト制が成立したとみる説。折衷説はジャーティを先住民の部族制度に起源するもの、ヴァルナをアーリア人のもとで成立したものとして捉えた説。／山崎元一『インド社会と新仏教』刀水書房1988年 p208
- 2) 小谷汪之『インドの中世社会』岩波書店 1989年 p163
- 3) プルシャ (purusa) とは、千の頭、千の眼、千の足をもち、造物主プラジャapati (Prajapati) が自分の子供である神々によって生贄として捧げられた巨大な原人である。過去にあったものおよび未来に存在するはずのものを含めた一切万有であり、神々の世界、人間の世界、生物の世界をも支配した。一切の万物は彼の四分の一であり、残りの四分の一は天界における不死である。／辻直四郎訳『リグ＝ヴェーダ』岩波書店 1984年 p320
- 4) S. Radhaakrishnan "Indian Philosophy" 2 Vol.1 Oxford University Press 1993 p112
- 5) 小谷汪之編『インドの不可触民』明石書店 1997年 pp21-22
- 6) 菅沼晃『ヒンドゥー教』評論社 1991年 p101

- 7) 上村勝彦・宮元啓一編『インドの夢 インドの愛』春秋社 1994年 p45
- 8) 辻直四郎『古代インドの説話』春秋社 pp22-25
- 9) 小谷汪之編『歴史・思想・構造』明石書店 1994年 p72
- 10) Otto Hermann Strauss “Indische Philosophie” ErnstReinhardt Verlag
1924／湯田豊訳『インド哲学』大東出版 p69
- 11) 早島鏡正・高崎直道・原実・前田専学『インド思想史』東京大学出版会 1991
年 p78
- 12) 奈良康明『仏教Ⅰ』山川出版社 p318
- 13) 谷川泰教「ジャイナ教の解脱観」（日本佛教學會年報第44号）日本佛教學會
1973年 pp31-32
- 14) 9) 前掲書 p81
- 15) 5) 前掲書 p20
- 16) 6) 前掲書 p130
- 17) 11) 前掲書 p116
- 18) 立川武蔵編『曼荼羅と輪廻』佼成出版社 1993年 p141
- 19) 9) 前掲書 p80
- 20) 12) 前掲書 p181
- 21) 小谷汪之『不可触民とカースト制度の歴史』明石書店 1996年 p81
- 22) 同上書 p114
- 23) 5) 前掲書 pp18-19
- 24) Vincent A. Smith “The Oxford History of India” Oxford University
Press 1992 p682
- 25) 21) 前掲書 pp142-143
- 26) 6) 前掲書 p218